



# 武蔵野

埼玉大学図書館 2010年7月15日6号



## 埼玉大学エコ 特集

### AGRICULTURE

新学期が始まり、早4ヶ月が過ぎました。じっとりした日が多く、梅雨本番です。局所的に集中豪雨になることも多く、異常気象といわれています。偏西風が蛇行し、世界的に気候の変動が激しいと報じられています。気温が35度以上も希ではなくなると、活動的・開放的な夏到来と喜ぶ前に、生命の危険を感じてしまいます。

大学内には、いろいろな仕事・活動・研究に従事する学生・教職員のみなさんがそろっています。幅広く話題を提供していただきたいと思います。今回は大学内のカルチャー、

AGRICULTURE を特集します。農業は、世界の食糧問題につながり、食の安全に直接関わります。今、中山間地の多くは、「限界集落」化しつつあり、一次産業は衰弱し産業構造は激変しました。農業の消失は里山の荒廃をもたらし、鳥獣被害を増加させ、人間の生活と動植物の生態系に大きな変化をもたらします。日本の将来を危惧し、警鐘を鳴らす書籍が発刊されています(大野明「限界集落と地域再生」高知新聞社、中嶋信「集落再生と日本の未来」自治体研究所、小田切徳美「農村再生」岩波書店、農村再生・若者白書 2010

編集委員会編「緑のふるさと協力隊」農文協)。

農業(牧畜、林業含む)は、季節の移り変わり、天候・気候に大きく影響され、自然界の科学的探求と深く結びつき、知識・技術の集積を促してきました。江戸時代には、農業全書が著され、農村生活、農業技術・文化が整理・集成されました。自然界と人間の関わりを深く捉え、文学作品にした宮沢賢治は農学校教師でした。大学内の「農」の活動を寄稿していただき、現代の私たちの生活・文化を考える機会にできたらと、企画いたしました。

(図書館長 坂西友秀)

## 埼玉大学から発信！有機農業でつながる輪

### 【大学生活の中に有機農業を取り入れる】

今から4年前、有機農家へのインターンシップに向けて、私のインターンシップでの経験を学生たちの前で話す機会がありました。しかし、実際に話してみると、まったく有機農業を知らない学生たちに、私が魅了された有機農業の楽しさ、そこから生

まれる人のつながりを説明することは非常に困難でした。そもそも、本城ゼミは独占禁止法のゼミであり、なぜ有機農家へ一週間も泊まらなければいけないのか、という不満が、歴代のゼミ学生たちには多かれ少なかれあったとおもいます。しかし、そういう不満を持った学生であっても、いざ有

機農家へ行って作業し寝食を共にしているうちに、不満がだんだんと薄れて、いきいきと作業や生活を楽しむ態度に変化する現象を、私自身の体験で目の当たりにしていたので不安はありませんでした。

その一方で、有機農業の知識などまったくない状態で毎年放り込まれる学生たちから、インターンシップ中「有機農業のことを知らなかったの、農家の人のお話についていけないときもあった。もっと有機農業のことを知りたくなった。」という声があったことも気になっていました。普通の学生は、インターンシップで有機農業の楽しさを知っても、その後の学生生活や就職後に有機農業や有機農家と触れ合うことは難しい状況です。就職後は仕方ないとしても、せめてインターンシップに行く前、ゼミで有機農業の知識を深めてみることはできないだろうか。このようなことに、先生も気付いておられたのでしょうか。その後、先生の勧めで、まだインターンシップに行く前のゼミ生達が、大学の職員から持ってきてもらう生ごみを使って大学内で堆肥を作ってみようという試みが始まりました。

#### 【有機農業をするまでの試行錯誤】

最初の年、都市部の住民でもできるというコンセプトで開発した衣装ケースを利用した生ごみ堆肥作りを実践しましたが、さ

まざまな要因で失敗してしまいました。その次の年からは、有機農家のアドバイスや指導を受けながら、木枠を利用した生ごみ堆肥作りを開始し、また、経済学部隣接している雑木林から落ち葉を集めて堆肥づくりに活用し、ある程度満足できる堆肥を作ることに成功しました。この試行錯誤の間に、教育学部附属農場の存在を知り、教育学部を去年退官された石田先生や、農場を管理していらっしゃった細田先生のお力添えで、農場の一角と教育学部の花壇をお借りすることができ、堆肥生産と有機菜園作り、そして一年を通してさまざまな野菜を楽しむまで一気に活動を広げることができました。

#### 【これからも広がる有機の輪】

以上の活動は、去年までゼミで行われていた活動です。しかし、ゼミ生だけではなく、もっと多くの学生や、埼玉大学にかかわる教職員やOBや地域の人たちにも有機農業の楽しさを知ってもらおうということで、今年度5月に有機農業を共に楽しもうという仲間を募集し、さらに、今まで生ごみ提供やさまざまな活動をバックアップしていただいた職員の木内さんをはじめ、ゼミの卒業生も含めた埼玉大学有機農業研究会を立ち上げることになりました。



参考①堆肥枠



参考②菜園の様子

現在は、食の安全が大きく騒がれたこともあり、「有機農業=無農薬・無化学肥料・安全」という認識が大多数です。しかし、有機農業の魅力はそれだけでなく、今まで埼玉大学から有機農業のインターンシップに参加した学生たちが経験したような、人

との出会い、自然との出会いから生まれるさまざまな奥深い魅力があるのです。

会の活動は、堆肥作りや菜園活動が軌道に乗りはじめたので余裕ができ、今年からは、有機農家の水田や雑木林を訪ねて有機農業に対する知識をさらに深めたり、雑木

林を訪ねて有機農業に対する知識をさらに深めたり、雑木林の手入れにも工夫をこらし、カブト虫など生き物が生息できるような豊かな雑木林にできるような手入れをしていく予定です。さらに雑木林の手入れが行き届いたら、しいたけの原木を置き、雑木林の中を清々しく楽しめるような空間に

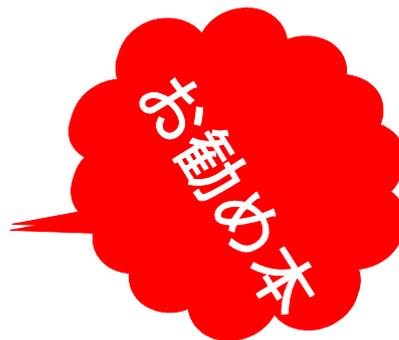
していこうと皆で楽しみながら話し合いを進めています。

まだ立ち上がったばかりの会ですが、今までの経験を活かしながら都市部に住んでいても有機農業や自然と触れ合い楽しめるような活動にしていこうを考えています。

(経済科学研究科博士前期過程 堀合知子)

### 【有機農業に興味を持たれた方へ】

最期になってしまいました。私たちの活動により有機農業に少しでも興味を持たれた方に、ぜひ読んでいただきたい本があります。栃木県で有機農家を営む館野 廣幸さんが書かれた「有機農業・みんなの疑問」(筑波書房)です。むずかしい哲学や環境意識に燃えるだけではない、有機農業の世界のあたたかさをこの本からは感じられると思います。また、館野さんの語り口は、私がこの文章で伝えきれない有機農業の世界の楽しさをわかりやすく記しておられます。埼玉大学の図書館にもあるので、



ぜひ足を運んでみてください。

(経済科学研究科博士前期過程 堀合知子)

## 有機農業に出会って

私が有機農業に出会うことになったきっかけは、大学3年の夏休みに参加した有機農家への1週間の泊り込みのインターンシップでした。わずか7日間のインターンシップでしたが、私は、そこで温かい農家の方との出会いを通じ、大きな感動を覚えました。そこには、人への温かい思いやりや、自然を慈しみ、自然に感謝する気持ちがあふれていました。私の所属するゼミでは、3年の夏休みになると、強制的に有機農家へのインターンシップが義務づけられていました。その頃、農業への興味

など全くなかった私は、インターンシップの初日、2日目には、朝早くからの辛い農作業や、玄米と野菜だけの食事に嫌気がさして早く帰りたいとさえ思っていました。そんな私の心を動かしたのは、有機農家の方の農業や自然に対する真剣で誠実な姿であり、自然の中で、生き生きと毎日を楽しそうに暮らす姿でした。また、自分のことよりも他人のことを当たり前のように考えてくれる心遣いに本当に感動しました。人との出会いの素晴らしさや、人間らしく生きることとはどういうことかを学ぶことの

できた素晴らしい体験でした。

このきっかけによって、私は、ゼミでの有機農業活動に取り組むようになりました。そして、自分が感動した有機農業とは何なのか、有機農業は現代社会の中でどのような意味を持つのか、農村とは何か、都市とは何か、考えることと勉強すべきことが沢山出てきたため、大学院に進学することを決心し、現在に至っています。

私が、有機農業活動の中で思うことは、「自然は人の思い通りにはならない」ということです。季節の野

菜も知らず、いつでも、どこでも、好きなだけ食べたい、という欲望を満たそうとすると、石油を原料とする化学肥料や、他の生物を殺す農薬を使用することになります。農業以外の漁業・畜産でも、食べ物の旬を無視し、過食を繰り返す食生活は、必ず自然に負担をかけることになります。しかし、自然にうまく働きかけ、微生物の力を借りれば、

落ち葉・生ゴミ・米ぬかという私達が普段ゴミとして扱っている資源を堆肥にすることができ、豊かな土壌がつかれます。そして、農薬を使わずとも、大学内の花壇で十分に野菜ができます。地球の裏側から、エネルギーを大量に使って食べ物を運んでくる必要もありません。

「自然は毎日十分に我々の需要品を生産する。各自

が必要以上のもを取らなければ、世界に貧はないであろう」とマハトマ・ガンジーは言いました。足元を耕し、その土地で取れる食べ物をおいしく食べる。私達の活動は小さく、派手さありませんが、大きな意義があるのではないかと思います。

( 経済科学研究科 1 年  
山本仁)



私のお薦めの本をご紹介します。それは、E.F.シューマッハーの『スモール・イズ・ビューティフル:人間中心の経済学』（講談社）です。この本は、現在の大量消費社会に対し、環境・資源面からだけでなく、経済や教育面など、様々な視点から我々に疑問を投げかけ、考えさせる良い本であると思います。有機農業に興味がない方にも読んでいただきたい本です。

( 経済科学研究科1年 山本仁)

## 埼玉大学有機農業研究会の展望

上述のようにゼミでは有機農業を実践してきました。学内における有機農業の活動は、現在次のステップへと進もうとしています。残念ながら今までの学内の有機農業に関する活動は、ほぼゼミ内に留まっており、その広がり、学内にすらあまり見られませんでした。

しかしながら、ゼミにおける活動が年々発展するにつれ、活動を少しずつでも外へ

広げていこうという機運が表れ始めました。そしてこの春、活動の拡大を実施へと移すため、試験的にではありますが、ゼミ外部から参加者を募りました。ご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、ゴールデンウィークあたりに「有機農業、学内でやりませんか？」と各学部等の掲示板に掲示をしてあったものがそれです。その結果、新たに数名の学生が参加してくれる

ことになりました。ゼミ内の活動から学内の活動へと展開したことにより、今までではできなかった活動の芽が出始めています。そこで、ゼミそのものとは別の構成でもあることから、今後この有機農業を行っていく面々とともに、「埼玉大学有機農業研究会」を立ち上げ、活動していくことにしています。

では、その「埼玉大学有機農業研究会」とはどのような活動を行うことになるのでしょうか。簡単に研究会の今後を見ていきたいと思えます。第1に活動の基礎として学内循環型の野菜づくりの継続からはじまると考えます。現在は教育学部の花壇や附属農場の一面をお借りして野菜づくりを行っており、そこでは、毎年学内で出る落ち葉と協力していただく方から供給していただいた野菜くず、これらに米糠や粃殻を加えた堆肥を使っています。現在行っているこの活動を野菜づくりの拡大にあわせ、堆肥づくりももう少し大きくしていきたいと考えています。この活動では、野菜づくりに加え、現在処分の対象としかかたない学内の落ち葉を構内循環の鍵として据えることが出来るようになります。つまり、学内でゴミとして（お金を使って）捨てられている落ち葉を、（お金を使わずに）活用できるのです。そして、以下の活動はこれに基づき、発展させた先にあります。で

すから、今後も堆肥を利用した美味しい野菜をつくっていくことが研究会の活動の重要な一角を占めると考えます。

第2に経済学部横の雑木林の整備です。現在、経済学部横の雑木林は、手入れ不足も祟ってか、非常に鬱蒼とした状態になっています。一時大量に生えていたシュロは切り倒されたものの、それが放置されたままになっていたり、いつのものか解らないようなゴミが捨てられていたり、残念ながら人がその中に入れるような状況ではないといわざるを得ません。この空間を整備することにより、堆肥づくりに良質な落ち葉の供給を可能にし、また、雑木林内にある程度人が入れる環境を作り、リラックスできる空間を作る、更にカブトムシなどが生息できる雑木林ならではの環境を作り出せるものと考えられます。

第3に、研究会外部との交流が挙げられます。先ほど書いたとおり、現在の活動は多少の広がりを見せたとはいえ、まだ学内、それも一部のみのものに留まっています。この活動を行っていく中で、ごく小規模で完結させてしまうことは勿体無いと思います。やはり、学内資源を有効に活かしながら活動をより広げ、より多くの人に、埼玉大の中にある自然や、活動について知っていただければ、そして参加していただければと思います。



武蔵野の面影を残す図書館前の雑木林

今後、埼玉大学有機農業研究会では、単に農産物を生産するというものではなく、上記の活動やそこから発展した活動等々、まだまだ活動の場を広げ、様々なことに取り組んでいきたいと思っています。単に農

作業を行うのではなく、その中に「楽しさ」を発見し、それを広げていくことが研究会の活動のあり方だと思います。

(経済科学研究科 有坂 昌平)

## 本の紹介

【松永勝彦「森が消えれば海も死ぬ」(第2版),講談社ブルーバックス,2010年】

本書では現代の海の一部の壊滅的な状況を端的に指摘し、その状況と流域に存在する森林の関係を示している。ある流域から通じる沿岸では森林が壊滅したことにより海中環境が変化し石灰藻が繁殖、海産資源が激減してしまうという事実があるという。それに対し、流域における森林がしっかりと残っている沿岸では海産資源がしっかりと取れているという。

森が消えれば



海も死ぬ

筆者によればこの差は森林により生み出される腐植、そしてその中に含まれるフルボ酸等にある。また、当該物質は有機農業を行う圃場においても発生するといいい、有機農業も海的环境に対しても資するとの指摘がなされている。埼玉大学有機農業研究会の活動も僅かではあるといえ、そのような価値も見出せるのかもしれない。多くの森と海の関係が記されている本書、新書ではあるものの、完結にその重要性がわかるという点で非常に優れているのではないかと思う。

(経済科学研究科 有坂 昌平)

## 日本大学文理学部図書館研修

日本大学文理学部事務局長等の経歴をお持ちの尾崎監事に案内を頂き、平成22年7月6日、世田谷区桜上水の日本大学文理学部図書館で、業務運営等の事例研修を受けました。学科・研究室を合わせた図書館の蔵書数は、日本大学文理学部も本学とほ

ぼ同数の約80万冊だそうです。2004年完成の新しい建物で、図書館とコンピュータ・センターと博物館相当施設である資料館等との複合施設でした。建物内の情報利用端末数は505台にのぼり、その中でもエントランス右手に位置するインフォメー



インフォメーション・スクウェア



グループ閲覧室



ラーニング・スクウェア

ション・スクウェアは明るいガラス張りで、160台の情報利用環境は見るだけでも圧倒されます。左手には資料館があり『武笠文庫の和書～日本文学を中心に～』が展示中でした。図書館では貴重書庫内も拝見することができました。閉館後も自習室と

して利用可能なラーニング・スクウェアや吸音性に優れたコルク材のフローリングに工夫が感じられました。今後の本学における図書館づくりの参考にさせて頂きたいと思います。

(図書資料係 早川雅代)



# けやきの窓

## 図書館に漫画本を！

教育学部長室には、趣味の教養文庫がある。もちろん、誰でも閲覧できる。日本文学全集全 60 巻から、谷崎潤一郎の『源氏物語』全 12 巻、吉川英治の『私本太平記』全 5 巻、『新・平家物語』全 10 巻、『永井荷風選集』全 5 巻などいずれも初版本が揃っている。最近では、こうした古典的なものは部屋の装飾品としてしか意味をもたなくなっているのだが、人気物は、漫画文庫だ。『ゴルゴ 31』全巻、白土三平の『カムイ伝』や『忍者武芸長』、そして、手塚治虫の作品がほぼ揃っている。

他にも、フランス革命の学習用に『ベルサイユのバラ』、日本の朝鮮半島植民地化の理解には、『漫画物語 韓国史』シリーズ、親と子どもと医師の権利関係の対立を学ぶには、『ブラックジャックによるしく』、資本主義の本質理解には、『まんが 資本論』・・・などなど、場所がないので、入れ替えをまわっている。とはいえ、私は、漫画オタクでもフリークでもなければ少女趣味でもない。

ロンドンには、漫画博物館がある。フランス中西部のアングレーブにある漫画博物館収蔵の 40% (1万 5 千冊) は、手塚治

虫をはじめとする日本の漫画本だ。明治大学でも、漫画図書館を開設する計画がある。国立のアニメ博物館建設計画に、国会で「無駄だ」と反対演説したのは、政権奪取前の鳩山由紀夫だ。浮世絵も漫画も日本が誇る優れた芸術なのだが、これらを収集し展示する本格的な博物館・図書館は、いまだにない。

世界に誇る芸術としての漫画文化の基礎を築いたのは、言うまでもなく手塚治虫だ。彼の最後の作品、というよりも未完の遺作となったのが、『ネオ・ファウスト』だ。彼は、ゲーテの『ファウスト』を題材とした作品を『ファウスト』(1950 年)、『百物語』(1971 年)、『ネオ・ファウスト』(1988 年) と、三回描いている。だが、何と言っても秀作は最後の『ネオ』だ。ファウストになりたいと願ったのは、社会の政治的激動とは無関係に、ただ、宇宙と生命の究極の在り方を研究してきながらいまだになにひとつ真理に到達できていないことに愕然としている孤高の天才老研究者一ノ関教授。教授の魂と引き換えに若い肉体と第二の人生を彼に与えて人工生命を作る希望を与える。

天才手塚にとって、生命の不思議と芸術(専門性)の永遠性は彼の生涯を貫く壮大なテーマだった。それは、『火の鳥』や『ブラックジャック』に反映している。手塚は、魂を悪魔に売り渡しでも、自らファウストになりたかったに違いない。ゲーテの『ファウスト』の終末は、死にゆくファイスト博士の魂を手に入れようとするメフィストの横から、天使がこれを、「たえず努力して励む者を、我らは救うことができる」と横取りして救済する。だが、『ネオ・ファ

ウスト』の最後の場面と手塚の結末は、大きく異なる方向になるようだ。なぜ、メフィストをセクシーな女性にしたのか？そして、結末に救いはあるのか…？果たして、悪魔との交わした契約成就の言葉、「世界よ止まれ、お前は美しい」を、一ノ関教授はどの場面で叫ぶのか?! 天才の未完は、その未完成性さは、シューベルトと同様、それ自体が偉大なる作品だ。最後には、絵コンテとセリフのみが掲載されている(朝日文庫版)。

『人間昆虫記』は、男の財産や才能をすべて盗んで自分のものとし、最後は相手を死に追いやる悪女の話。魂を売ったものの姿、それは日本社会の本質理解にも通じる。これは、手塚の芸術至上主義批判の芸術論としても読める。いや、作者がどうであれ、作品は永遠に残るという手塚のメッセージなのか。「虚構と模造の上に組み立てられたきのバイタリティーにはかえって脱帽するよ」と魂を吸いとられた男に言わしめるセリフの奇妙なリアリティ。それは『ばらばら』にも通底する。

世界中に日本人が跋扈するようになった現代。日本人の姿をグローバルな中に置いたときにどのように見えるのかは、『グリーンゴ』をお勧めする。いまから 30 年も前の作品だが、山崎豊子の『沈まぬ太陽』にも通じる強烈な日本人論だ。異色な手塚作品としては、『人間ども集まれ！』を紹介しよう。ストーリーは、紹介しない方がよいだろうが、「太平天国」とは何であったのかの知識くらいは世界史の教科書で復習しておいた方が深い読みができる。手塚が、子ども漫画から大人漫画への脱却を模索していた頃の試験的作品で、絵は、黄桜のキャラクター河童や「仙人部落」の作者小島

功に似た軽いタッチが珍しい。

『MW』(ムー)は、暴力と狂気をここまで描くかという作品で、手塚漫画は、『鉄腕アトム』、『リボンの騎士』、『ジャングル大帝』なんかだと理解している人には、衝撃的だろう。同性愛を扱っている点も珍らしい。

日本の戦後の謀略と戦前の封建性のおどろおどろしさをクロスさせた『奇子』は、GHQとか松川事件、朝鮮戦争について、ちょっと勉強してから読むと面白い。人間関係の描き方は、横溝正史にも似ている。

その他にも小品ながら、一冊の小説以上に深く心に迫る作品がたくさんある。『時計仕掛けのりんご』は、『時計仕掛けのオレンジ』のパロディなのだが、『ブラックジャック』のピノコの原型がここにあり、原爆、ベトナム戦争やテロの問題を鋭くえぐる小品のアンソロジーだ。北海道に行くときには『火の山』と『シュリマ』がおすすめ。後者は、差別的な表現があるとして、最近では手に入れにくくなっているが、日本の最初の植民地であった北海道経営とは何であったのかは、日本史教科書よりも面白く学べる。

(教育学部長/教授 山口和孝)

## 全国国立大学図書館協会総会報告

6月18日、19日に札幌市札幌パークホテルを会場に、第57回総会が開催されました。今、大学図書館が抱える共通課題を2点ご報告いたします。1つは、大学図書館の果たすべき役割は何か、情報技術が日々革新される現在、図書館の存在そのものの意義も含めて明確にすることです。大学の規模により図書館の改革は異なりますが、概ね学生の学習を促進するために図書館の利便性を高めることと、学習活動の支援を教員と図書館が連携して進めることの2つです。電子情報の利用を容易にするため大量のPCを配置する大学もあります。書籍が電子化される中、大日本印刷・丸善が電子出版の強化と電子書店の開設をすると報じられています。図書情報の電子化と図書館の今後については、機会を改めて腰を据

えて検討すべき大きな課題です。

第二は、研究論文が電子情報化され、大手企業が電子ジャーナルとして占有する事態が進行していることです。電子ジャーナルはパッケージで販売され、包括されるタイトル数が多く利便性は極めて高いものです。しかし、価格は図書館予算を大きく圧迫するほどの高額です。埼玉大学の電子ジャーナル契約は、年額約6,200万円です。しかも、価格は年々10%弱値上がりします。運営費交付金が減額される今、早晚契約難に陥ることは必至でしょう。一大学を越えた世界的国家的な問題であり、大学等の研究とその成果の公共性、学術論文の独占と公共的利用のあり方を問わざるを得ない時期にきています。

(図書館長 坂西友秀)